

平成27年度北陸地区国立大学学術研究連携支援報告書

研究グループ名	中華圏モダニズム研究会北陸分会 (支援期間：平成26年度～平成27年度)			
大学名	所属	氏名		
富山大学	人文学部	○齊藤 大紀		
金沢大学	外国語教育研究センター	○杉村 安幾子		
福井大学	教育地域科学部	○田村 容子		
注1. 各大学の研究グループ責任者の氏名には○印。 注2. 所属（その他の機関については職名も）については、平成28年3月末現在を記入。				
その他の機関 の 構 成 員	機 関 名	所 属	職 名	氏 名
成果概要	<p>わが国における「環日本海地域」の中核をなす北陸三県は、古来、対岸の中国と密接な交流がなされてきた地域であるが、近代においても留学生の交流や文化の交流において多様な成果が得られてきた地域である。しかしながら、特に近代の北陸と中国の文化交流は、いまだ十分な研究がなされていないのが現状である。本プロジェクトでは、北陸地区三大学に在籍する近代中国文学・文化の研究者が、それぞれの専門研究の蓄積を活かしつつ、相互に緊密に連携し、新たな研究成果を示すことで、近代における北陸地区と中国との文化交流の一端を明らかにすることを達成目標とする。</p> <p>具体的に目指される成果は、以下の通りである。</p> <p>富山においては、現富山大学五福キャンパスにかつて置かれた陸軍歩兵35連隊にゆかりの深い空閑昇（1887-1932）の事跡（第一次上海事変の際に自決）について研究を進める。空閑は「軍神」とされ、当時、日中双方のメディアによって盛んに報道がなされている。中国では、現代中国のモダニズムを代表する作家・穆時英（1912-1940）によって小説『空閑少佐』が著され、日本では、真山青果（1873-1948）によって脚本『空閑少佐』が著された。穆時英『空閑少佐』については、鈴木将久一橋大学教授、李征復旦大学教授らによって論考が示されているが、空閑昇とゆかりの深い北陸地区の視点からも研究を深める必要があると思われる。</p> <p>金沢においては、旧制第四高等学校に毎年少数ながらも中国からの留学生が入学していた。その中に後に台湾に渡り、政治家として活躍した齊世英（1899-1987）がいるが、彼自身の伝記や娘である齊邦媛（1924-）の伝記には、四高で受けた授業や読書生活が後の彼自身の思想及び文化的基盤を造り上げたことが記されている。こうした北陸から発せられた中国・台湾への近代文化・思想の潮流については、いまだ詳しい研究がなされておらず、研究の端緒を開くべきであると考えます。</p> <p>福井においては、福井県出身で「近代奇術の祖」といわれる松旭斎天一（1853-1912）の上海巡業、また1931年から1936年まで存続した福井県内の百貨店「だるま屋」専属の少女歌劇団の戦争関連演目に、日中近代都市芸能と北陸との関わりを見ることが可能である。本研究では、上海・大阪・東京・台北など都市を跨ぎ同時代的に隆盛した近代メディア研究という枠組みから、その北陸への伝播と影響を明らかにする。</p> <p>齊藤は、空閑昇の事跡を記した書籍資料①高木臨川『武士道の精華空閑少佐』愛国出版社、1932、②綿貫六助『武人の鑑空閑大隊長』（金蘭社、1932）、③水島荘介『嗚呼忠烈・空閑少佐と肉弾三勇士』（誠光堂出版部、1932）、④浅野安太郎・浅野桜魂『空閑大隊長自刃の真相録』（敬天愛人運動名古屋支部、1933）、⑤真山青果『空閑少佐』（『キング』1932年6-8月号連載、後に『真山青果全集』第7巻、大日本雄弁会講談社、1941年所収）および『朝日新聞』等新聞資料を収集し、それらを精読することを通して、1. 空閑昇年譜の作成、2. 日本における空閑昇像の形成過程の検証を行った。その一方で穆時英の小説『空閑少佐』の翻訳を進めつつ、穆時英による“空閑昇”像の形成過程について</p>			

	<p>て、研究を進めてきた。そのうえで、中国現代文学の作家・穆時英が執筆した『空閑少佐』と比較し、穆時英の作品が、金沢連隊、富山連隊などのもつ地方共同体的な側面を消去した、上海という大都市から描いた空閑少佐像であることを指摘した。</p> <p>杉村は金沢大学資料館所蔵の旧制第四高等学校関連の資料から齊世英（1899-1987）に関する資料を渉猟し、論文「金沢第四高等学校における齊世英」を執筆。論文集『漂泊の叙事——一九四〇年代東アジアにおける分裂と接触』（濱田麻矢・薛化元・梅家玲・唐顯芸編、勉誠出版、2015年12月刊行）に収録された。また、旧制第四高等学校に留学していた中国人留学生のうち、中国共産党の初期黨員であった王学文（1895-1985）と台湾において抗日復台の英雄とされた丘念台（1894-1967）の事蹟を調査し、齊世英を加えたこの三人が四高在学時に社会主義思想に出会い強い影響を受けたことを確認。成果報告会においては「第四高等学校中国人留学生の社会主義への傾倒」と題して発表を行なった。中でも、後に中国を代表する経済学者となった王学文が、社会主義的思潮を教養や文化としてではなく実践を伴う形で受容していった過程は、日本人学生の社会主義受容との相違の面からも重要な指摘となったと言える。</p> <p>田村は、当初の計画にもとづき調査を進めたところ、敦賀港を經由してウラジオストク・ハルビンといった「北方の都市からもたらされる近代化」という新たな研究課題が浮上した。そのため計画を変更し、敦賀～ウラジオストク～満洲をつなぐ人物として戸泉米子（1912-2009、浦潮本願寺住職の妻、福井県日・ロ親善協会元会長）関連の資料収集を行ったほか、1917年創刊の『浦潮日報』の資料調査を行った。成果報告会においては『浦潮日報』にみる「支那」と「支那人」と題し、ウラジオストクの在留日本人向けの記事から抽出した「支那」「支那人」にまつわるイメージを整理した。ウラジオストクでは、オペラやダンスといったモダンな文化が「露国」「露人」を通して日本人の間でも享受され、同じ生活圏には「支那人」も存在し、「支那劇」の受容などもあったことが確認できる。当時の「支那」「支那人」への視線は植民地主義の影響が色濃くあらわれる一方、中露の文化が共存したウラジオストクというコスモポリタン都市の空間と、敦賀との航路を通じた関わりについて指摘した。</p>
<p>獲得した外部資金</p>	<p>【採択】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H27 科研費基盤研究（C）（一般）（H27～29），文化都市・青島における知識人ネットワークと都市表象の研究，齊藤大紀（代表），杉村安幾子（分担），4,550千円 ・H27 科研費挑戦的萌芽研究（H27～H29），中国現代文学における通俗小説——Xu Xu・Wumingshiを中心に，杉村安幾子（代表），1,200千円 ・H26 科研費基盤研究（C）（一般）（H25～27），日中戦争期重慶における民族主義文壇の成熟と在重慶知識人ネットワーク，齊藤大紀（分担），2,800千円 ・H26 科研費基盤研究（C）（一般）（H26～28），20世紀中国プロパガンダ芸術の多角的研究—ポスター・連環画・様板戯，田村容子（代表），4,990千円 ・H26 科研費基盤研究（B）（一般）（H25～28），社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ研究—旧ソ連・中国・ベトナム，田村容子（分担），13,300千円 ・H26 科研費基盤研究（B）（一般）（H25～27），「乳房」の図像と記憶—中国・ロシア・日本の表象比較研究，田村容子（分担），11,100千円 ・H27 科研費基盤研究（C）（一般）（H27～29），二〇世紀中国演劇上演実態の「記録」に関する研究—メディアとの影響関係を中心に，田村容子（分担），4,420千円 ・H28 科研費基盤研究（B）（一般）（H28～30），現代中国語圏文化における逸脱の表象，田村容子（分担），7,930千円 ・H28 科研費基盤研究（C）（一般）（H28～30），連環画の総合的研究，田村容子（分担），4,420千円